

三 次の文章を読んで、問いに答えよ。

ある人はいはく、「俊頼の髓脳に、定頼中納言、公任大納言に、和泉式部と赤染衛門とが劣り勝りを問はる。大納言はいはく、『式部は「津の国のこやとも人をいふべきに隙こそなけれ蘆の八重葎き」と詠める者なり。一つ口にいふべからず」と侍りければ、中納言重ねていはく、『式部が歌には、「暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月」といふ歌をこそ、世の人は秀歌と申しはべるめれ』といふ。大納言はいはく、『それぞ世の人の知らぬことをいふよ。暗きより暗きに入ることは経の文なれば、いふにも及ばず。末の句はまた本に引かれて、やすく詠まれぬべし。「こやとも人をいふべきに」といひて「隙こそなけれ蘆の八重葎き」といへるこそ、凡夫の思ひ寄るべきことにもあらね』と答へられけるよし侍るめり。

これに二つの不審あり。一つには、式部を勝れるよしことわられたれど、その頃のしかるべき会、晴の歌合などを見れば、赤染をばさかりに賞して、式部は漏れたること多かり。一つには、式部が二首の歌を今見れば、『はるかに照らせ』といふ歌は、言葉も姿もことのほかにたけ高く、また景気もあり。いかなれば大納言はしかことわられけるにや。かたがたおぼつかなくなむはべる』といふ。

予、試みにこれを会釈す。

式部・赤染が勝劣は、大納言一人定められたるにあらず。世こそぞりて、A をすぐれたりと思へり。しかあれど、人のしわざは主のある世には、その人柄によりて劣り勝ることあり。歌の方はB さうなき上手なれど、身のふるまひ、もてなし、心用ゐなどの、C には及びがたかりけるにや。紫式部が日記といふものを見れば、A 「和泉式部はけしからぬ方こそあれど、うちとけて文走り書きたるに、その方の才ある方も、はかなき言葉のほひも見えはべるめり。歌はまことの歌よみにはあらず。口に任せたることどもに、かならずをかしき一節目とまる、詠み添へはべるめり。されど、人の詠みたらむ歌難じことわりあたらむ、いでやさまでは心得じ。ただ口に歌の詠まるるなめり。はづかしの歌よみやとは覚えず。丹波守の北の方をば、宮・殿などわたりには、匡衡衛門とぞいひはべる。ことにやむことなきほどならねど、まことにゆゑゆるしう、歌よみとて、よろづのことにつけて詠み散らさねど、聞こえたるかぎりは、はかなき折節のことも、それこそはづかしき口つきにはべれ」と

書けり。かかれば、その時は人さまにもち消たれて、歌の方も思ふばかり用ゐられねど、まことには上手なれば、秀歌も多く、ことに触れつつ、まのなく詠みおくほどに、撰集どもにもあまた入れるにこそ。

さて、かの式部が歌にとりての劣り勝りは、公任卿のことわりのいはれぬにもあらず、今の不審のひがことなるにもあらず。これはよく心得て思ひ分くべきことなり。歌は、作り立てたる風情たくみはゆゆしけれど、その歌の品を定むる時、さしもなきこともあり。また思ひ寄れるところは及びがたくしもあらねど、うち聞くにたけもあり、艶にも覚えて、景気浮かぶ歌も侍りかし。されば、詮は、歌よみのほどをまさしく定めむには、「こやとも人を」といふ歌を取るとも、式部が秀歌はいづれぞと選ぶには、「はるかに照らせ」といふ歌の勝るべきにこそ。たとへば、道のほとりにてなほざりに見つけたりとも、黄金は宝なるべし。いみじく巧みに作り立てたれど、櫛・針などのたぐひは、さらに宝とするに足らず。また心ばせをいはむ日は、黄金求めたる、さらに主の高名にあらず。針のたぐひ宝にあらねど、これをものの上手のしわざとは定むべきがごとくなり。しかれば、大納言の、その心を会釈せらるべかりけるにや。もしはまた、歌の善悪も世々に変はるものなれば、その世に「こやとも人を」といふ歌の勝る方もありけるを、なべて人の心得ざりけるにや。後の人定むべし。

(「無名抄」による)

注 俊頼の髓脳Ⅱ『俊頼髓脳』。歌論書。 景気Ⅱ詩的雰囲気。歌学用語。

丹波守の北の方Ⅱ赤染衛門。丹波守大江匡衡の妻だった。

問1 傍線①の「る」、②の「る」、③の「ね」、④の「るる」の文法的意味として、最も適当なものを、それぞれ次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 自発
- 2 打消
- 3 受身
- 4 尊敬
- 5 完了